

## 「学級」を捉える

荒井 英治郎（信州大学 学術研究院総合人間科学系）

### 1. はじめに

本稿は、2022年度に開講した教職科目（選択）「現代社会と教育問題」（2022年11月29日）の授業にオンラインゲストとしてご参加いただいたゲストティーチャー（庄子寛之氏：調布市立多摩川小学校指導教諭）の講演内容を再構成したものである。記録作成に当たっては、山田海智さん、後藤友作さんに尽力いただいた。記して感謝を申し上げたい。

### 2. ゲストティーチャーの話

#### (1) 残るもの、残ることを伝えていく

【ゲスト】「教育とは学校で学んだことを忘れた後に残るものである」というアインシュタインの言葉があります。

皆さんにとって教育とは何でしょうか。おそらく学校のことで記憶しているのは、勉強のことだけではなく、例えば、担任の先生のくだらない話、褒められたこと以上に怒られたこと、そしてすごくどうでもいいようなことなど、色々なことが出てくると思います。そういうところを大切にしていきたいと思いつつ、普段授業をしています。学習指導要領の内容や教科書にあることを教えることはもちろん大切ですが、この「忘れた後に残ること」を子どもたちに伝えていきたいと考えています。学校は、根性や努力や忍耐や我慢といった要素が強くなってしまいがちです。そこで「何か残るものを教えているか」といつも自問自答しながら

ら、「残るものを教えたい」と意識しながら授業をしています。

現在、人口が減少しているのにも関わらず、私が小学生の時から同じ教育がなされています。小学校1年生ではひらがなを教え、小学校2年生では掛け算を教え、それも黒板と紙を使って授業している。暗記しなくてはいけないことは「しなければならぬ」と言いながら教えて、最近はコロナでなくなってきましたが、全校朝会であれば何時間何十分も月曜の朝から立って我慢して聞く生活が今も成り立っている状況です。それが決して悪いと言っているわけではなく、人口がずっと増えてきた私たちの先輩たちの世代と比べて、これからの急降下の時代を生きること考えると、教えていくことも変わっていかなくてはいけないと感じています。また、1人1台端末で、できることは無限に広がっているわけで、今までの良さはもちろん生かしていくけれども、従来の教育に囚われない新しい教育観を考

えていかななくてはならないと思っています。

(2) 指導からの脱却を目指して

【ゲスト】私は道徳の指導教諭をしています。そこでは、「特定の考え方を教える」より「子どもたちをよりよくしていきたい」「幸せになって欲しい」という思いでやっています。例えば、道徳の時間で、命は大切にしなければならぬ、友たちと仲良くするべきだといった「道徳」的なことを教えるのではなく、道徳以外の授業も含めて、全ての授業でやっていくことを大切にしています。道徳授業だけで、道徳教育をしないということですね。もちろん、1つ1つの授業で狙いはありますが、狙い通りに達成させるよりは、長い目で見ていくイメージです。当たり前のことですが、たった45分の授業で子どもは変容するようではしません。それを踏まえると、その授業で「子どもたちが今日の授業に対してどういうテンションでいるのか」を見ていくことが大切です。

授業では、「分かるを分からないにする」ことを大事にしています。学校現場は分からないことを、分かるにしようとしがちですが、スッキリするだけでは科学の進展はないと思っています。よくある「こういうことが分かりました」と腑に落ちるだけではなく、その先を目指しています。1人1台端末がありますので簡単に物事は調べられます。教科書を飛び越えて日常と繋がることを考えることで、分かったことによって分からないことが生まれることを常に繰り返していきたいと思っています。これは「ミューラーリヤーの錯視」のスライドですが、どちらが長く見えるでしょうか。

【参加者】 下の方が長く見えます。

【ゲスト】実際この絵は、下を少し長くする細工をしています。下の方が明らかに長いのです。これは「ミューラーリヤーの錯視」と左上に書いてあるから、私の表情を見て、「下」と言ったほうがいいのか「同じ」と言った方がいいのかと考えた方と、素直にどっちが長いか本気で見た方とでは、大きな違いがあります。子どもたちにもまさに同じことが言えて、どうしても子どもたちは教師の表情から正解を探してしまいます。無意識で「先生は何と言って欲しいのだろう」と子どもたちは考えてしまっている現状を鑑みて、私は答えを持ちつつも、子どもたちから学ぶという姿勢でやっています。

また、「子どもが聞く時間を短くする」ことも大切にしています。私の実体験ですが、小学校1年生の時、朝顔が成長しませんでした。原因は水のあげすぎでした。私たちはつい水をあげすぎて成長させなかったり、栄養を無理に何回もあげて過多になってしまったり、まだ支柱が必要な時期ではないのに支柱を立てて巻きつけたり、といったことをしてしまいます。教師もそういうところがあると思います。何もしなくても身長も伸びて、体重も増えて、できることが増えるのに、教師や親が「あれをやりなさい、これをやりなさい」と先回りして準備するからこそ、子どもがやりたくなくなってしまうことがあります。だからこそ、あまり先回りしないで、ある意味、放置する。放任ではなく、あまり与えすぎず、子どもたちが「欲しい」と言ったらすぐあげられる準備をする。支柱はいつか確実に必要になりま

すので、用意はしておくけどすぐに出さないで、「支柱が欲しい」と言われた時に支柱を出せるようにしてあげる。つまり、栄養が足りてない、水がなくて乾いてもう腐りそうだといいところになって、ちゃんと出せるかということが重要です。この塩梅は子どもたちの声をしっかり聞いて、見極めていきたいと思っています。

ポイントは、指導からの脱却です。勝手に学ぶことができるのに、教師は無理に伸ばそうとしてしまう。こういう発言をすると、放任と思われがちですが、放任ではありません。「手はかけないけど、目はかける」という言葉に近いですが、どうしても授業という、上から物を言いがちですが、学習環境と最低限の道具だけ用意して、子どもたちが自ら学んでいく形をとっています。そして、最後のステップで、子どもから学ぶことを大切にしています。

### (3) 教育はこのままでいいのか

【ゲスト】今までの教育が変わらなくてはいけなくなると、どうしても今までの経験を否定されているように感じてしまいますが、決してそうではありません。その時はその時のベストの教育があったと思います。そのような中で時代の変化が激しいからこそ、今までとは違う教育も考えていかなくはいけなし、今まで良かったと思われる色々な考えは、今後も是非大切にしていきたいと思っています。きっと自分自身も成長している中で、色々な変化が生まれてきて、違う教育がされていくと思います。

私も初任の時に教えていた流れと、10年前に教えていたことと、今教えていること

は全然違うと感じています。色々な環境の中で「こうだ」と「こうすべきだ」と思っているものは変化していきますし、逆に変化しないとすると古いものを残していこうということだけになり、進化が止まってしまってしまうと思いますから、常に今の考えを整理していくことが大切だと思っています。そして、1人1人の才能をしっかり見抜いて、そこを伸ばしてあげられる教育をしていきたいと日頃考えています。

生産年齢人口が50年間で半分になるということは、大人になってからやらなくてはいけないことが確実に変わってくるということを意味します。その場合、学校現場は大人になった時、よりよく生きる力を持った大人を育てることが1つの目標であるのに対して、社会の大人像が変わっているのに子どもに教えることが変わらなくていいわけがないです。既に文科省からも同調圧力や成果主義、一斉授業や平等公平主義からの転換、個別最適な学びや協働的な学びが叫ばれていますが、学校現場もそれに向けて動いているところもあります。他方で、私たち教員も、実際に授業にどう落とし込めばいいのか難しいところでもあります。

### (4) 「非生産的」にフォーカスする

【ゲスト】最近不登校のデータが公表されましたが、皆さんが小学生の頃の不登校問題とはまた違う問題がかなり出ています。

「ビッグマック指数」と言われますけれども、2020年の段階で日本は5位でした。日本は安い国になっているという情報はご存知かと思いますが、やはりこれだけ円が安い状態で、今までは東南アジアなどから日

本に出稼ぎに来ることがあったかと思いますが、これだけ円安になると逆の現象が生まれてきます。日本で働きたいと考える外国人が減り、日本語を使う人が減ってくると、私たち日本人も今までは日本語だけで大丈夫だったけれども、日本語を使う人が少ないということは、学校教育で日本語を教える時間の割合についても考えていかななくてはいけなくなります。

今、マイナスな情報を話して不安を煽ってしまったかもしれませんが、私はやっぱり日本が好きです。私は、ラクロスなどで海外に行く機会がありますが、日本人をリスペクトする海外の人は本当にたくさんいらっしゃいますので、日本人が日本人の中だけで「日本はダメだ」と言っている気がしています。加えて、1番端の国、海を挟んでいる島国ですから、情報が入ってくるのが本当に遅いと感じていました。そうすると、自分にできることは何だろうかと思って続けていることが、私は東京の指導教諭として島も回っていますから、人口が減少する島の高齢化が顕著だからこそ、島に行ってみることが大事ではないかと思って、今島のことでも色々なサミットをやっています。

これが最近の私の具体的なアクションの1つです。島に熱い先生たちで何か日本の未来が掴めるのではないかという思いです。皆さんの中でも何ができるのか、教師になってから考えるのではなくて、今、大学生だからできること、今ご自身の立場だからこそできることがきっとあると思います。

私たちの受けてきた教育は、うなぎ登りに人口が増えてきた中で、人口が増えるということは、物を買う人が増え、何もしなくても豊かになっていきます。逆に言えば人

口が減るとということは、買う人が減るのだからどんどん安くするか、何か差別化して売るしかありません。そうすると、正しいものを正しくやることよりも、みんなが考えないことをやる能力が求められてきています。学校でも教師の考える範囲内でやるのではなくて、誰も考えないことを生み出す力を大切にしたいと思っています。

ところで、社会は、不便を便利にしようという能力で発展していきます。ただもう相当便利になっていますよね。例えば、炊飯器があればお米は炊けるし、食べ物で言えばコンビニがあって作る必要すらない。もう「食べる」ことに時間を費やす必要がなくなっているわけですね。そう考えると、それ以外のところに時間が生まれてきますが、その時間を何に使っているかと言ったら、より便利に、より便利にということ、日本人に限らず忙しく働いている。便利になって、時間がどんどん生まれているのだから本当はみんなもっとのんびりするはずなのに、のんびりできない現象が生まれています。便利さは豊かさに繋がらないと思っています。例えば我が家だったら、ご飯を一緒に作らなくなると妻とのコミュニケーションが減るのです。「キャンプブーム」が起きていますが、そこでは不便なことをわざわざやるわけですね。ここにはこれからの世の中で生きるヒントがあると思っています。「スロープを段差にして手を差し伸べる」というアイデアがあって、バリアフリーとしてスロープを作ろうとなりがちですが、あえて段差を意図的に作って、そこに人を配置し、例えば、車椅子の人が「ああ、ここは段差だからできない」となったら「助けましょうか」と言えるコミュニケーションが

必然的に生まれる環境を小学校現場でも作っていきたいと思っています。便利にして、タブレットの共有機能で送るようなこともあります。それよりも、目の前に人がいるのだから顔を見せて喋ればいいし、そこから生まれる「非生産的」なものがより「生産的」になっていくことがあるかと思っています。

私たちの常識より、大学生の常識の方が新しいかもしれないし、より若い小学生の方が新しいことを考えられるかもしれない。ということを見ると、私たちは今まで年配の方や詳しい方、それについて長くやってきた方に教を請うことがあったと思うのですが、それ以上に自分より下の人から今の時代について学んで、それから自分の経験値を生かして、新しいものを生み出すことが、とても大切だと思っています。今の考えはあなたの正解であって、未来の正解ではないわけですよ。今日正解だと言われていることが明日不正解と言われる時代だからこそ、今の正解はこれだけど、明日には変わるかもしれないと思いながら、学び続けることが大切です。例えば、その子が授業をちゃんと受けていなかったら「なんで受けていないの」ではなくて、「どうしたの」と聞いてあげて、その日の朝の状況を聞くとか、やりたくないものを強引にやらせるのではなくて、やらない権利を認めてあげて、やることを大切にしたいと思っています。

#### (5) 大切にしている先人の言葉

【ゲスト】ニーチェの「事実という言葉は存在しない。そこには解釈があるだけだ」という言葉があります。例えば、子どもが、私が

一生懸命やった授業をあまりやらずに寝そべって聞いているとします。やっていないということにイラッとする解釈をするのも私ですし、昨日何かあったのかな、この子はできる子なのだと思います。ちょっとそっとしておこうという判断をするのも私ですから、事実はあるのですが、それをどう解釈するかによって、見方が変わります。本当にありのままを認めていくと、子どもたちは本当に自ら輝いていくから、強引に「〇〇やりなさい」とか「〇〇するべきだ」とか、自分の価値観を子どもたちにぶつけないということを日々意識しています。

大事なことは人を変えることではなくて、まず自分の心の状態を上機嫌に整えておいて、子どもをしっかりとよく見て、クラスの子どもたちから学ぼうと思いながら授業をする。できる限り喋らずに、でも伝えなくてはいけない時は、こういうことを注意した方がいいよと伝える。それをひたすら繰り返していく。私たちが不機嫌だと、子どもたちも不機嫌になります。だから自分の状態をしっかり整えておいて、常に子どもたちの前では笑顔でいることも大事だし、自分の状態が悪いのだとしたら、今日はなんか気分が悪いことを正直に話して、子どもたちに「実は家でこんなことがあってどう思う」とか言うと、「やっぱりそれは先生が悪いよ」とか言われたら「そうだよな」とかいう話をします。そういう時間が実は子どもたちの記憶に残っていたり、子どもたちの行動力に変わったりします。

またデューイの「もし昨日と同じように今日も教えるならば、あなたは子どもたちの未来を奪っている」という言葉があります。やはり変化し続けなくてははいけません。

こうやって話をさせていただくときも、スライドは同じものは使いますが、毎回その環境によって内容を変えています。常にチャレンジして、常に状態に応じて変えて、今日が終わった後に反省をして、次回の講演の時にはその反省を生かして、また工夫していきたいと思っています。

#### (6) 質疑応答

【参加者】子どもたちの声を聞くことは、口で言うのは簡単ですが、実際はとても難しいと思います。現場で子どもたちの声を聞くときに大切にされてきたことや、今までで生徒に与えすぎてしまった、逆に与えなさすぎてしまったという経験はありますか。

【ゲスト】与えなさすぎてしまったと思うことは1回もありません。それぐらいまだ与えすぎていると思います。今日も授業をしてきましたが、あそこで喋りすぎたなどという反省の方が多いです。まだまだ「起立、気をつけ、礼」や「今やらないとこれ、中学校行ったらテストに出るからね」といった言葉を使っている現状がまだあります。ですから、常に喋りながら自分をアップデートしていかなくてはいけないと思っています。

与えすぎたことに関しては、縄跳びで学校内1位を目指して、縄跳びが好きでない生徒にもやらせて、「お前がちゃんと集中してないからダメなのだ」と言ったり、「お前なんか前を見てないのだったらやらなくていい」と叱ったりしたこともあります。それなりに結果が出たとしても、全員が良い思

いをしていないと思います。これは、教師の自己承認欲求に繋がる話です。「先生のおかげでこんなにできました」みたいなことを言われるのは教師冥利に尽きますから、そういった自己承認欲求全てを排除する必要はないと思いますが、その辺をいかに消せるかが大事です。まだまだ私も「毛穴から出ているよ」とよく言われることがありますが、そういう思いをできる限り減らして、自分が黒子に徹せられるようにしていきたいです。

生徒の声を聞いて、生徒理解に努める際は、「自分は生徒のことを分かっている」というおこがましさを減らすことが大事です。私たちは学校の現状しか見ていませんから、例えば、いつもちゃんとやる子がやっていない、そういう子に対してここはやるべきだからという強制は必要なくて、そのときになんでこの子はやらないのだろうと考えるべきだと思います。いつもやっている子がやらなかった場合は、この2、3日のうちに何かあったのだろうかということに目を当てるし、ずっとやらない、いわゆる問題児みたいな子をもらうことは恐らく多々あると思いますが、そうなった場合は家庭環境で問題があったのか、そもそも生まれた時の何かがあったのか、何かしらがあるわけです。もともとの学力が低いから、勉強がいつもつまらないという風になると、その子のことをしっかり見取りつつ、自分にできることは何だろうかということを常に考え続けますから、自分の「べき論」をぶつけないことは大切にしています。

【参加者】どんなことを意識して普段小学生に向かってお話されていますか。

【ゲスト】基本的には「ゆっくり」ということを大切にしています。また、私は、「声の高さ」と「圧」をかなり意識しています。あえて、怒っていたり注意したりしたときは、声を低くして言ったり、楽しそうなときは声を高くして言います。時には、怒っているように装って褒める時も低い声で言うこともします。「ねえ」と低い声で言うと、みんながバンと静かになります、「どうしてこんなにすごいことができるの」という褒め言葉を言うと、「怒るのかと思ったよ」という感じで話を聞いてくれることがありますね。

私は、話すという言葉自体に影響力が少ないと思っています。言葉よりも表情を使ったり、ただ黙って黒板の前に立ったりなど、言葉に頼らないことはかなり意識しています。例えば今日は、早く別の教室に移動してほしいときは、「早く行きなさい」と言わずに電気を消したり、隙間時間に音楽を流しておいて、「この音楽が止まったらもう出なきゃいけない」というように子ども本人が考えることを大事にしています。つまり、「言葉は通じない」という意識ですね。言ったのにやらない子がいた場合に、その子が悪いと捉えず、日本語しか使わなかった自分が悪いと反省し、次の工夫を考えることも大切ではないかと思っています。

【参加者】小学校での道徳教育は、学年で足並みを揃える必要はありますか。

【ゲスト】道徳に限りませんが、足並みは揃える必要があると思っています。足並みを揃えることは、大きなキーワードです。22

歳の時、私は良い先輩に恵まれて、若さしか武器がありませんし、授業力もないから、隣の先生よりも良い授業をしてやろうとずっと思っていました。ですから、足並みは揃えないし、揃えないことも普通に許されてきました。しかし2校目になり、自分より若い先生と組むことが多くなってくると、自分が目立ってしまうと周りが被害を受けることも考えて、やはり揃えなくてはいけないという意識が強くなりました。ですが、同じことをやっても力量もキャラクターも違いますから揃いません。お互いの良さを出す授業をすることが今は必要だと思っています。足並みは揃わないにしても、お互いに協力して、「1人勝ちしない」ことは意識しつつ、全員が幸せになれる教育をしたいと思っています。

【参加者】教師にはそれぞれ教育の理念を持って「揃えよう」とすると「自分の理念を優先させたい」という思いも出てくると思いますが、線引きは難しいでしょうか。

【ゲスト】職員室でお互いの理念に関して、討論ができる環境を作っていく必要があると思っています。自分は教師として、どんな子どもを育てていきたいのか、少し青臭くて喋れない感覚はあるでしょうが、「だから私はここの授業はこうしている」というように話すべきだと思います。例えば、「ビシッと並ばせて、体育館に行きたい」と思う先生には、「授業中に人に迷惑をかけてはいけないし、世の中に出ても迷惑をかける子には育てて欲しくない」「みんながちゃんと静かにしているところは静かにして欲しい」という理念の下で色々なことをやられてい

るのに対し、「いや、そんなところは別にどうでもいい。人に最低限迷惑をかけなければ、とにかく早く行った方が良い」という理念を持っている方もいます。お互いの考えがある中で、そこに対して話し合う必要があると思います。ただ話し合えるような環境がない場合は、自分の考えをとにかく喋ることが大事だと思います。私も、とにかく喋り続けていきたいですし、良い職員室を作るために何ができるかは日頃から意識しています。

【参加者】中学になると内申書を意識して、教師の顔色を伺うことが指摘されていますが、自由にやることと、罰を受けることがセットになりやすく、弊害があると思いますが、いかがでしょうか。

【ゲスト】実際、顔色を見なくていいというわけでもないですよ。顔色を見て判断する、言葉がなくても通じるのは、日本人の良さでもあると思います。ただ、このグローバルな世の中で、日本人の良さとして生かすのは良いと思いますが、空気を読むことばかりでは、世界と勝負していく上で競争から抜け落ちてしまうことを踏まえると、意見を発信していくことが必要になってくると思っています。新しいものを生み出すことは周りにたくさん敵がいて、それはやめるよと言われても貫き通す力もとても大切になってきますから、そんな資質能力が伸びる教育をしていきたいです。

中学校では内申書による影響は確実にあると思っています。一発勝負のテストだけではなく、今までやってきたことで評価をしたい点もありますから、難しいところで

す。出口が、良い中学校、良い高校、良い大学、良い社会人といったとっくに終わっている幻想を割と信じてしまうところがありますから、どうメスを入れていくかですね。顔色を伺うことは決して悪いことではありませんが、そういう回数は減らしていきたいし、個人的には内申書に関しても、点数よりは今までやってきた内容に方向を変えられると良いと考えています。

【参加者】子どもたちのひとりひとりの資質能力を伸ばすということに関して、子どもによっては競争することで向上心を持って、自分ができることに取り組むと思いますが、時に褒めすぎてしまって「このままでいいや」と思う子もいるかもしれません。こういう場合、どのように指導されますか。

【ゲスト】「伸ばす」といった場合、何ををもって伸ばしているのかということを考えてくなくてははいけません。例えば、どんな教科においても、字を書けない子は能力が低いと見なされるわけですが、書くことができないとしても、理科的なことですごくできる子もいるし、道徳で言えば、心がとても素敵な子もいるし、学校ではずっと馬鹿でお荷物扱いだったけど、社会で活躍している人もたくさんいます。成績では低い点数を付けざるを得ないけれども、その子は将来しっかり生きていける、その子はその子のままでちゃんと素晴らしいという感覚を持ちつつ、育てていくことが大切だと思います。

【参加者】Yahoo!ニュースでの「公立学校の先生で超絶多忙なのに毎日17時に帰る」を読みました。超絶多忙な公立学校の先生



が何をしたら毎日 17 時に帰れるのですか。

【ゲスト】大前提としては、5時に帰れます。先生は忙しいと言いますが、何をもって忙しいかと言われると難しいです。ただ、私は割と朝は早く来ますが、定時に来て定時に帰れないことがないかと言われたら、別にそんなこともありません。どんなに仕事があっても 5時に帰ると決めてしまえば、5時に帰りますから、その後溜まっているものに関しては、人の迷惑にならないようにやっていくことが大事です。

ただ、5時に帰ることだけが正義ではなくて、5時以降に残っている人がやってくれていることもたくさんありますか、そこに対する感謝を忘れないことも大切です。

最後に、是非、大学時代に色々な場所に行って、色々な方と繋がってください。教員志望の学生が「こんなことをしたいです」とか「見に行かせてください」と言ったら、断る人はほとんどいないと思います。ですから、自分が何者であるかは関係なく、すごい人や尊敬する人と、実際にお会いして会話することで、絶対何か学びが生まれると思います。私も若いころはそうやって生きてきました。是非積極的に行動していただきたいですね。